地域社会における仏教寺院の役割（一）

―佛光寺における年間活動についての聞き取りを中心として―

徳野　崇行、武井　謙悟、池野　雄太

一　寺院調査について

駒澤大学の附置研究所である仏教経済研究所は、駒澤大学の建学の理念に基づき、仏教と経済に関する研究を行うことを目的として、昭和四十一年（一九六六年）四月に創設された。以来、『仏教経済研究』という当研究所の機関誌を中心として学術的な発信がなされてきた。こうした諸研究の中で現代の経済的な営為に対して仏教の考え方を活用するための提案がなされてきた。それらの多くは仏教と経済との関係を理念的に研究するアプローチといっても大過ないであろう。

その一方で、経済を含む仏教寺院の現状を調査・研究するアプローチは当研究所による活動の中であまりなされてこなかった。日本には二〇一七年現在、七七、二〇六法人もの仏教系寺院があり、神社に次いで多い宗教団体となっている。[1] 都道府県によって寺院数や宗派の偏りはあるものの、[2] 仏教寺院は全国に遍在しており、地域を代表する古刹の年中行事が風物詩となっている場合も少なくない。

こうした状況を鑑み、二〇一六年度より本研究所では、駒澤大学が曹洞宗の宗門大学としての役割を果たし、曹洞宗寺院とのつながりも多くあるため、こうした性格を活用して曹洞宗を中心とした仏教寺院の現状を探る寺院調査を実施することとなった。

第一回目となる二〇一六年度の調査では、三重県紀北町に所在する曹洞宗寺院の佛光寺を主な対象として調査を実施し、調査目的を以下のように設定した。

本調査の目的は、三重県紀北町に所在する佛光寺を対象として、地域社会に果たす仏教寺院の役割を調査することにある。また紀伊長島という熊野と伊勢に挟まれた地理的環境に立地する佛光寺と関連する宗教施設についても調査を行う。

実施期間は平成二十九年二月二十七日から三月一日の三日間で二月二十八日に佛光寺でのインタビュー調査を実施した。調査を担当したのは、仏教経済研究所所員の徳野崇行、駒澤大学大学院博士後期課程の武井謙悟、修士課程の池野雄太の三名である。

二　三重県紀北町佛光寺の概略

第一回目の調査において主な調査対象となった佛光寺の概略について述べたい。佛光寺は三重県北牟婁郡紀北町長島に位置しており、山号は大島山である（写真1）。紀北町は二〇〇五年十月十一日に海山町と紀伊長島町が合併して誕生した自治体であり、合併以前は紀伊長島町に所在していた。

写真１　佛光寺の外観

写真２　津波流死塔

寛永四年（一六二七）傑山宗英居士が開基となり、風国大順が開創した。大順は師の三洲大竜を請して開山とする。[3] 当寺には貫山祖通（一七三七―一七九五）が撰述し、天巌祖麟が増補した寛政五年（一七九二）の序と文政一〇年（一八二七）の跋文をもつ『佛光寺歴住祖師伝贊』が所蔵されている。[4] 本書は佛光寺の開山から十一世までの歴代住職の行実を記したものであり、『続曹洞宗全書』に載録されている。[5]

以上のように、佛光寺は紀伊半島を代表する曹洞宗の古刹である。曹洞宗の行政区分で言えば、佛光寺は三重県第一宗務所、第二十八教区に所属する。三重県第二十八教区は十三ヵ寺で構成され、一ヶ寺を除き十一ヵ寺は佛光寺の末寺である。

写真３　流死塔の説明パネル

佛光寺の境内には「津波流死塔」と呼ばれる塔が建立されている（写真2）。これは近世に起きた大津波による犠牲者を供養する塔であり、一つは宝永四年（一七〇七）のもので、もう一つは安政元年（一八五四）のものである。安政の碑には「嘉永七甲寅年六月十四日丑の刻大地震、夫より十一月迄震動数度、同四日巳の刻大地震、直津浪流家四百八十軒余、汐入三百十軒位、流死弐拾参人におよぶ」とあり、[6] 東海地方で起きた大津波による凄惨な出来事を後世に伝えている。これらの流死塔は東日本大震災以後に防災意識が高まる中で再評価されており、寺院側で二〇一六年三月にパネルが設置された（写真3）。

本調査におけるインタビューは、佛光寺住職の龍谷顯孝氏と、副住職の龍谷孝道氏に行なった。龍谷顯孝氏は調査

当時、佛光寺住職のほか、保育園の園長、裁判所調停委員、駒澤大学監事、曹洞宗宗会議員という役職を務めていた。

三　佛光寺の年中行事

本調査のインタビューでは、寺院の年中行事についてうかがった。インタビュー結果を月日の順に時系列でまとめたものが次頁の「表1」である。本報告では、適宜住職の言葉を引用しつつ、現代における寺院の活動状況を年中行事から見ていく。

佛光寺の年中行事はまず正月三箇日の行事から始まる。三箇日は室中諷経、朝課、三朝祈禱、秋葉堂で鎮守諷経が営まれる。朝課に先んじて営まれる室中（しつちゅう）諷経の「室中」とは、法を伝える師の室内を意味し、伝法受授相伝の場となる部屋を指す。佛光寺の「室中諷経」は、本堂の西室中に最乗寺了庵派の流れを汲む開山からの歴代住職の袈裟と頂相を荘厳して、これを礼拝する儀礼を言う。最乗寺系の了庵慧明禅師、曇英慧応禅師以降の法系がずっと一本で続いており、他法が入っていないため、歴代の三物、頂相、袈裟が揃っているという。式次第は口伝により、まず三国伝灯列祖大和尚に三拝、開山大和尚に三拝、歴住諸位大和尚に三拝して心経・消災呪・世尊偈・根本神呪を読誦するというものである。

大晦日から元旦にかけて檀信徒は除夜の鐘を打ち、位牌堂にお参りする。一月三日以降は三朝祈禱が済んだお札の配布と年頭の挨拶のため、檀信徒各家を廻る。最近は自宅にいない場合も多く、そうした時は玄関やポストにお札を入れる。

一月五日は佛光寺の末寺による年頭挨拶がある。江戸時代は末寺が二十ヵ寺ほどあったが、今は十一ヵ寺である。末寺の宗侶や法類が内賀の拝を行い、本堂での行茶の後、住職が年頭の口宣を行って設斎となる。以前は庫院で料理

を準備していたが、O157が流行してからは近くの料理屋に行く形をとっている。一月十五日に大般若による法要があり、漁師町なので大漁祈願・海上安全を祈るとともに檀信徒の祈禱を行う。一月十七日は秋葉権現に対する鎮守諷経となり、厄落としをするが、この日を「お念仏の口開け」とし、元旦から十七日までは葬儀や法事を一切行わず、十八日以降に営む慣例となっている。また山上に祀られた愛宕明神のために、一月二十四日に祈禱を行う。

表１　紀伊長島　佛光寺の年中行事

月　日	儀　礼
１月１日から３日	室中諷経、朝課、修正会（三朝祈禱）、鎮守諷経（秋葉堂）
１月３日	檀信徒の年頭挨拶
１月５日	末寺の年頭挨拶、内賀の拝、行茶
１月15日	転読大般若祈祷
１月17日	鎮守諷経（秋葉堂）、念仏の口開け
１月24日	愛宕神社での祈禱
２月15日	涅槃会
３月春分の日前後	春彼岸
５月８日	花祭り
７月中旬	石経
８月７日～16日	おぉ踊り（念仏踊り）
８月13日	お盆の準備（迎え火、うますすり）
８月14日	山門施餓鬼
８月15日	棚経
８月16日	初盆施餓鬼
９月秋分の日前後	秋彼岸
11月中旬	開山忌
12月８日	成道会
12月31日	歳末諷経、除夜の鐘
＊月例で金曜の予定が合う日に坐禅会を実施。	

二月十五日は涅槃会で、三月は「法事月」「年忌月」であり、彼岸の期間などに法事を行う。週末は御法事が多く、多忙を極める。

花祭は四月八日に営むのが一般的だが、佛光寺では月遅れの五月八日に開催している。以前は幼稚園の園児が白い象をひいてパレードを実施していた。しかし近年では道路の交通事情や園児の減少といった理由から本堂での法

要とお話しだけにしている。本堂には花御堂を設けて園児が灌仏を行う。お檀家さんが朝からお参りして甘茶をペットボトルや水筒に入れて持って返る。昔は甘茶で墨をすると字が上手になるといったり、家の回りに撒くとムカデ除けになったりするといった言い伝えがあった。

灌仏会については以前檀信徒も参加することもあったが、現在は内々でやろうということになっている。また本堂で園児たちに法話を行っている。三、四歳の子どもたちに話を聞いてもらうのは難しいが、できるだけ短くポイントを絞ってお釈迦様のこと、甘茶のこと、ご先祖様のことを少しずつ話している。その後に開山堂へ行き、ご先祖さまについて説明し、達摩像の靴で頭を撫でると賢くなるという言い伝えがあるので、花祭の時にも園児たちの頭を靴で撫でる。

七月中旬頃に海上安全を祈る「石経（いしぎょう）」という儀礼を行う。かつては紀北町南西の海上にある大島に上陸して転読大般若による祈禱を行っていた。大般若に記載された海中で龍が守るという話に基づく儀礼ではないかという。拳大の石に般若心経の一節を書き、それを祈禱札でくるんで大島までポイント・ポイントで海中に投じていく。昔は陸と船上と大島で合計三回の祈禱を行っていたが、現在は大島丸という三〇トンの船の上だけで行っている。少し南の地域でも石経を行っている地域があるが、そこでは正月に実施している。

二〇メートル幅の「さばる」という島の先端に祈禱札をつけた竹を指す。以前は檀信徒の漁師が小刀をくわえて紐を持ち、竿を担いで岩場にくくりつけていたが、今は安全第一で竿の下に重しをつけて海中に放る形になっている。龍谷顯孝氏が住職になってから石経を実施しなかった年が過去に二度あったが、いずれもその年に漁師が亡くなる海難事故が起こり、漁業組合の人々の中で、やはり祈禱をやらなければだめだという話になり、今も続いている。二〇一二年九月に宮城県金華山東方沖でパナマ籍貨物船と漁船堀栄丸が衝突する事故が起きたが、この漁船は

三重外湾漁協紀州北支所（紀北町紀伊長島区）所属のカツオ一本釣り漁船であった。亡くなった乗組員十三人中、佛光寺の檀信徒は十一人おり、いくら祈禱しても及ばないことがあるという。この石経という儀礼は、佛光寺以外では紀伊半島だと北牟婁郡紀北町島勝浦の安楽寺、尾鷲市須賀利町にある普済寺が行っている。

お盆行事として八月七日から十六日まで「おぉ踊り」と呼ばれる念仏踊りを行っている。八月七日から十三日までは本堂を会場とし、十四日から十六日までは屋外で太鼓や鉦を打つ。十六日は線香に火を灯して浜まで送る。「おぉ踊り」の歌詞（後掲参照）の中に紀州から江戸までの航路に関する地名などが含まれているので、東海沿岸部にひろまったものだろうという。現在は佛光寺の総代たちが「おぉ踊り保存会」を結成し、護持会の支援を受けつつ十五人が所属して揃いの浴衣を作成し活動している。

写真４　佛光寺『おぉ踊り』

現在は踊りが無くなり歌だけになっている。歌もたくさんあったが、だんだんやる人が少なくなって、先代住職の晩年に熱心な総代さんが歌詞をまとめたいということで編集した。ずっと口伝で伝わってきたものを文字に起こして冊子を作成した（写真４）。

佛光寺では「うますり」といって施食棚を祀るのに赤白二枚の半紙大の紙を用いる。八月十三日はお盆の迎え火を焚く日であり、この盆入りの日に檀家は赤白二枚の紙を持って佛光寺を訪れる。版木二組が玄関に設置され、赤

い紙には馬と般若心経の一節が彫られた版木で、白い紙には地蔵菩薩の版木で紙を刷る。

関東などではお盆に祀ったキュウリの馬がご先祖様を乗せてやって来ると説くが、佛光寺では地蔵菩薩が先導してご先祖様を馬に乗せてやってくると説明している。この他、檀信徒各家の香炉用の灰として海岸で集めた砂と灰を混ぜたものや、ミルでひいた茶葉を紙に包んで配る。これらは昔、檀信徒が自宅の南西にあたる屋外の場所に各家で設けた施食棚のお供えとして用いていたが、今は自宅内の仏壇に用いられている。

八月十四日は山門大施食会、八月十五日は初盆の檀信徒の棚経に回り、八月十六日は初盆檀信徒合同の施食会を本堂で営む。昔は檀家全部を棚経で回っていたが、今は回りきれないので、初盆の檀家のみ棚経に回っている。五如来などの幡は紙製のものを用いており、盆礼は二十日に法類の慰労会を兼ねて懇親会を行う。

他の寺院と同様に秋彼岸のある九月、十月は法事を多く営んでいる。年忌に当たった故人の法事を個別にすることが少なくなってきているので、一周忌はできるだけ個別に供養してあげて下さいと声をかけている。しかし、最近だと一周忌もまとめてする例が多くなってきている。年忌の一年前や後の故人を含めて五霊も六霊もまとめて実施することもあり、回忌は三から七と四年か六年の周期となるので、だいたい五年に一回くらいは法事をしましょうという形になっていて、彼岸に近い故人の年忌などに併せて法事を行う。衣類も夏や冬などに比べて気にしなくてよいため、この時期に法事を営む檀家が多い。かつて出された島津家のお触れの名残で、節制のため閏年には法事をしないという慣習が残っている。また毎月一日に法事を営まないことになっているが、これはおそらく祝祷日によるものであろうという。

十一月中旬には旧暦の十月十日が佛光寺二世中興風国大順禅師の正忌となるため、中興忌を営む。大順禅師は十一ヵ寺ある末寺の勧請開山となっているので、末寺の開山忌も兼ねて佛光寺で営まれている。式次第は逮夜が歎

仏会、正当が十八拝差定となり、特派布教師による法話も行っている。法類が約二十人参加し、禅心会も加えて三十人規模の法要で、教区の青年会である禅心会の研修という意味合いもある。今は声明をするということが無くなってきているので、年に一回くらい節回しを練習して思い出すという機会になればよいという。佛光寺の場合、教区と本末の関係が一ヶ寺を除いて重なり合っているので、身内のようなものなので一体感を持ってできる。住職は「地方の御本寺で、法類の集まりが年に三回あるということで、つながりがあって、色々と、世間のことから、我々の流れですね。会館ができて御葬儀もどんどん役僧や導師のつきあいも無くなって、そうした情報交換を行う」と語る。

十二月は八日の成道会を営み、かつては正月用の餅を搗いていたが、今は行っていない。下旬は歳末の準備から除夜の鐘などで一年が締め括られる。

以上、年中行事について述べてきたが、以下では月例の行事について見ていきたい。まず佛光寺の月例行事で中心となっているのが、副住職である龍谷孝道氏が中心となって開催している坐禅会である。参加者の予定が合う金曜日に開催している。参加者は十名前後で午後七時から一炷坐り、その後茶話会という形で行っている。かつて禅心会で月に一度の坐禅会を行っており、檀信徒に参加を呼びかけたところ最初は七十人くらい集まった。しかし、一年経つと十人になり、三年目には五人になり、運営に携わる教区寺院の参加者の方が多くなってしまい、止めることとなった。あんまり構えてやると長続きしないので、今の坐禅会では副住職一人でできる範囲でやってもらう形にしているという。

月分行事については、この坐禅会の他に依頼があった月忌供養を行っている。加えて毎月二十一日に弘法大師の法要を行っている。これは佛光寺の前身となった真言宗寺院の伽藍で営まれるもので、般若心経、消災呪、世尊偈、南無大師遍照金剛という式次第で営まれる。その他、毎月二十四日に町内の路地の角に四つある地蔵像前で法要を

行っている。

墓地については佛光寺に寺院墓地がないため、檀信徒の九十九％が町営の墓地にお墓を持っている状況であるという。追善仏事については、初七日以降の法事は基本的には施食会で行っており、差定は大悲心陀羅尼、甘露門、宝鏡三昧行道三匝、施食回向である。葬儀後の初七日の法要に四十九日法要や百箇日法要をまとめるのは全体で一割ない程度である。その多くは十二月に亡くなった方の場合で、佛光寺では「念仏の口開け」となる一月十七日まで法事ができず、また年をまたぎたくないという意向からまとめて営む場合があった。しかし、近年では、喪主が遠方に居住している場合に何度も帰省することが難しいということから、まとめて営むケースもある。四十九日の法要では、施主が四十九個の小さな餅と大きな餅一個を菓子店などに発注して仏前に供え、法要後に自宅へ持ち帰る。死者が屋根から旅立っていくという言い伝えから、大きな餅をちぎって屋根に撒いたり、食べたりなどする。

民間信仰については、月末に死去して四十九日が三ヶ月にまたぐと「悪いモノが身につく」といって縁起が悪いと言われているため相談に来る檀信徒がいる。また巫者的な民間宗教者に「先祖さんの供養してないから悪いことが起こったんやぞ」と言われたんですが、といった相談を受けることもある。しかし、そういった迷信的なことについては気にしなくていいんですよと伝えている。

また先代の住職の頃、佛光寺の山の上にある愛宕神社で啓示を受けたという女性が愛宕一心教会という新宗教を組織して活動を行っていた。この教会は佛光寺と反目する訳ではなく、昭和三十七年九月に建立された魚鱗供養塔を願主として寄進し、春秋二回に佛光寺にて供養法会を施主となって営んでいた。一時は三千人ほどの信者がおり、京都の愛宕神社や高野山や永平寺などに団参を行い、インドにパゴダを建てた。開祖となった女性が亡くなって以降は活動が停滞しているが、一月二十六日の愛宕神社での法要には愛宕一心教会の関係者が今も参列している。

四　考察

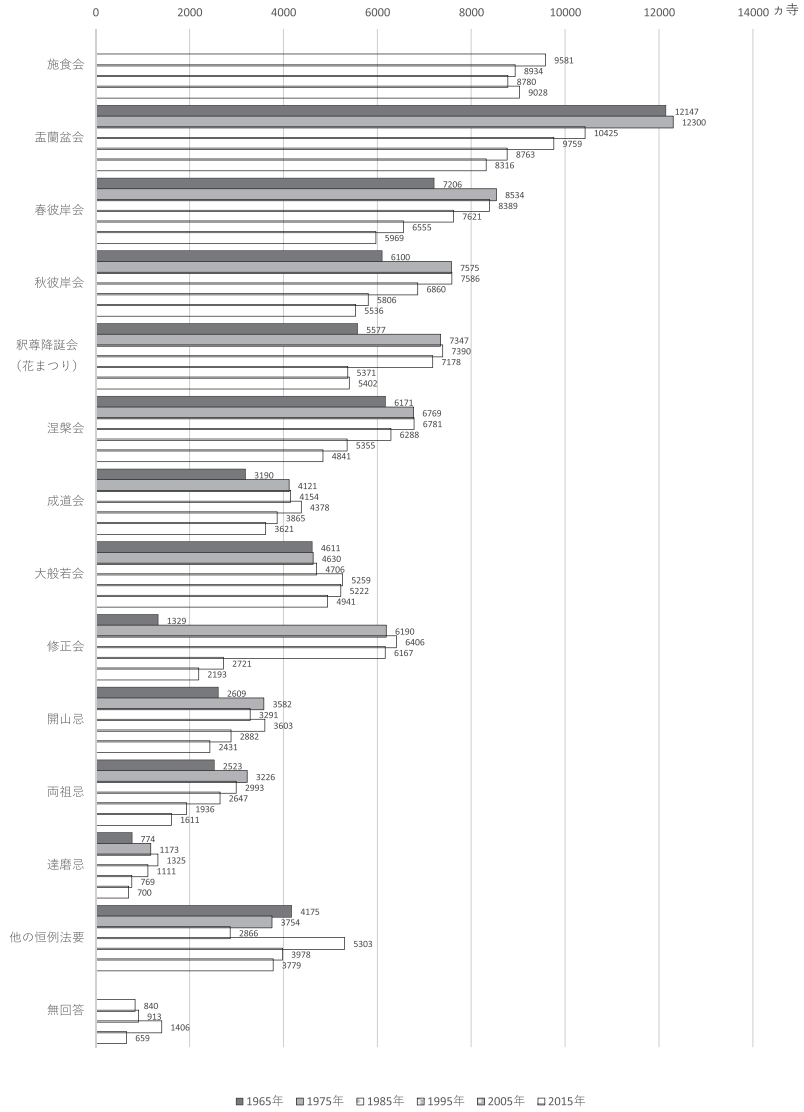
以上、佛光寺の年中行事や月例の行事、葬儀、追善仏事に関するインタビューの結果について報告した。この結果をもとに、他の曹洞宗寺院と比較しつつ、佛光寺の行事について考えて見たい。「グラフ1」は一九六五年から二〇一五年にかけて実施された曹洞宗宗勢総合調査をもとに曹洞宗寺院の年中行事についてまとめたものである。(7)

「グラフ1」が示すように、曹洞宗寺院では、概ね施食会や盂蘭盆会、春秋彼岸といった先祖供養の儀礼が多くの寺院で実施されており、それに次いで釈尊に関する三仏忌などの法要、修正会や大般若会といった祈禱法会が続いている。一方、開山忌や両祖忌の実施率は必ずしも高いものではない。

こうした宗門寺院全体の傾向と佛光寺の行事とを比較して見たとき、まず佛光寺の行事の中で特徴的なのは室中諷経であると言えるだろう。寺院を開いた開山をはじめとする歴代の住職を対象とする法要は毎朝の朝課で言えば仏祖諷経や開山歴住諷経、年中行事で言えば開山忌がある。しかし佛光寺では、これらの行事とは別に室中諷経を三朝祈禱に合わせて営んでおり、管見の限りこうした形態は稀である。そもそも各寺院において開山から歴代の三物、頂相、袈裟が揃っているという状況は極めて稀であるため、そうした物質的状況に依拠しつつ、佛光寺では法統を重視する儀礼が年始を彩る儀礼として営まれているのである。

一方、石経に代表されるように、漁業に関する祈禱儀礼が大きな年中行事となっている点も佛光寺の特色と考えてよいだろう。先述したように石経は般若心経という経文が記された石を海に撒きつつ、大般若転読によって海を守る竜神の加護を得て、それを海上安全、大漁祈願という利益に結びつける儀礼である。この儀礼は漁業が盛んな紀伊長島の地理的環境を反映したものであり、境内にある魚鱗供養塔もその特色をよく示している。

グラフ１　曹洞宗寺院の恒例法要の実施状況



曹洞宗に限らず沿岸部に所在し、漁業に携わる檀信徒がいる寺院であれば、大漁祈願や海上安全の祈禱や海難物故者の供養を営むことは珍しいことではない。漁業関係者の多くの信仰を集める仏教寺院として山形県鶴岡市の善宝寺が有名であるが、善宝寺における祈禱は伽藍内で厳修されている。[8] 祈禱殿のような建物がない場合は、本堂での法要や海辺に臨時で設けられた祭壇で営むケースが多い。こうした状況を鑑みた時、佛光寺の石経が島や海を舞台としている点が特徴的と位置づけられるであろう。つまり、佛光寺の石経は海との深い繋がりを儀礼空間によって象徴する形になっているのである。

また本末関係と教区寺院の構成がほとんど重なり合っている点を活かして、本末関係の寺院行事と教区行事とが連関して営まれている点を指摘したい。佛光寺では年始挨拶や開山忌という儀礼が、単に寺院の本末関係の紐帯を構築するだけでなく、教区という曹洞宗寺院の行政単位として結束を深める場になっている点は注目してよいだろう。開山忌などの後に営まれる設斎では、葬儀や追善供養に関する情報交換が行われるという。こうした会話は単なる世間話ではなく、過疎化といった寺院を取り巻く社会問題について確認し合い、葬儀会場の動向、法事の簡略化や檀家離れといった檀信徒の変化、地域に果たす寺院の社会貢献といった今後のビジョンを共有化する場になっている。

最後に地域の伝統行事の保存を佛光寺が担っている点を指摘したい。先述したように、佛光寺では「おぉ踊り保存会」という内部の組織が形成され、地域の伝統行事である「おぉ踊り」の保存活動が行われている。本報告の末尾に掲載したのはこの活動の成果である『おぉ踊り』という冊子の翻刻であり、「念仏踊り」「あたご詣り」「中踊り」「ゑと踊り」の四点を載録している。伝統行事を継続するだけなく、保存していくことで、地域社会の文化を継承する取り組みと言える。

以上、紀伊長島に所在する佛光寺という曹洞宗寺院の現状について、年中行事を中心に述べてきた。冒頭で論じ

たように、本報告は仏教経済研究所の取り組みの一環であり、現代日本における仏教寺院の現状を探るプロジェクトによるものである。来年度以降もこの寺院調査を継続し、その成果を本誌で報告することで、現代の仏教寺院の現状や地域社会に果たしている役割などについて発信していきたい。

謝辞　本研究所のインタビュー調査をご快諾いただきました佛光寺住職の龍谷顯孝様と副住職の龍谷孝道様に記して感謝を示します。誠にありがとうございました。

〈付録資料〉佛光寺おぉ踊り保存会編『おぉ踊り』

〔表紙〕

おぉ踊り

佛光寺おぉ踊り保存会

◆念仏踊り

アーソ　ラ　又　おきさく申そなら
アーソリヤ　今宵　夜は七月
アーソリヤ　明日の夜は八月
アーソ　ラ　沖で何やら光ぞ
アーソリヤ　月か星か蛍か
アーソ　ラ　お精霊様の御為に
アーソリヤ　南無阿彌陀佛　阿彌陀佛

◆あたご詣り

愛宕詣りに袖を曳かれて
アイヨ　これも愛宕の御利生かな
見え透く　見え透く
生絹のかたびら
見ーえすく

竹の切節に溜りし水は
アイヨ　澄まず　濁らず　出ず入らず
囃し言葉は同じ

◆中踊り
ソラ　中踊りこそ　サー　おおかさにさいて
アーヨシタイ
おおかさにさいて　なおよかろ
ヒヨタンヤ
ソラ　踊ろうと主人に　サー　暇もろうて
アーヨシタイ
嬉しや　盆じゃ　七月じゃ
ヒヨタンヤ
ソラ　踊り場は狭し　サー　刀は長し
アーヨシタイ
佩すまいものよ　長刀
ヒヨタンヤ

二五六

ソラ　三浦浜は　サー　どんと鳴るは
アーヨシタイ
江戸船方は　おりわせぬ
ヒヨタンヤ
ソラ　江戸船方は　サー　下りわせぬど
アーヨシタイ
三浦の浜は年くせじゃ
ヒヨタンヤ
ソラ　尊い寺は　サー　門から知れる
アーヨシタイ
清水寺の尊とさよ
ヒヨタンヤ
ソラ　踊ろとはねよと　サー　今日明日ばかり
アーヨシタイ
明日から山へ草かりに
ヒヨタンヤ
ソラ　しをれた草を　サー　刈ろうとすれば

アーヨシタイ
新しい鎌の柄が折れた
ヒヨタンヤ
ソラ　折れたらまゝよ　サー　こぼれたらまゝよ
アーヨシタイ
世界に鍛冶屋はないものよ
ヒヨタンヤ
ソラ　出垣内の芋の　サー　繁葉の良さよ
アーヨシタイ
子に子が生えて尚よかろ
ヒヨタンヤ
ソラ　向への山で　サー　鳴くヒヨ鳥で
アーヨシタイ
朝草刈りの　目を醒す
ヒヨタンヤ
ソラ　今年の盆に　サー　踊らぬ者は
アーヨシタイ
精霊棚にほり上げておいて

ヨーヨシタイ
ビシヤ　シヤ木花で水むける
ヒヨタンヤ

◆ゑと踊り
父はお江戸ゑ双六売りに
アーソーリヤ
お母様は山へ百合折りに
アーソーリヤ
ゑいゑいとーこ　ゑゑいと
ゑいとこ　ゑいとこ　ゑ
百合折り　竹は中から折れて
アーソーリヤ
お母様は　思い思わせる
ゑいゑいとーこ　ゑゑいと
ゑいとこ　ゑいとこ　ゑ　（以上）

註

（1）文化庁編『宗教年鑑　平成二十九年版』（文化庁、二〇一七年）三四頁。
（2）小田匡保「日本における仏教諸宗派の分布――仏教地域区分図作成の試み」『駒沢地理』第三十九号（二〇〇三年）。
（3）「室中」の項参照『新版　禅学大辞典』（大修館書店、一九八五年）一〇八五頁頁。
（4）『曹洞宗全書　解説』（曹洞宗全書刊行会、一九七八年）五九五頁。
（5）『続曹洞宗全書　第一〇巻　寺誌・史伝』（曹洞宗全書刊行会、一九七六年）。
（6）「佛光寺」の項参照『大和・紀伊寺院神社大事典』（平凡社、一九九七年）。
（7）「グラフ1」の数値は『昭和四〇年　曹洞宗総合調査報告書』（曹洞宗宗務庁、一九六六年）、『昭和五〇年　曹洞宗宗勢総合調査報告書』（曹洞宗宗務庁、一九七六年）、『昭和六〇年　曹洞宗宗勢総合調査報告書』（曹洞宗宗務庁、一九八七年）、『一九九五（平成七）年　曹洞宗宗勢総合調査報告書』（曹洞宗宗務庁、一九九八年）、『二〇〇五（平成一七）年　曹洞宗宗勢総合調査報告書』（曹洞宗宗務庁、二〇〇八年）、『曹洞宗宗勢総合調査報告書　二〇一五（平成二七）年』（曹洞宗宗務庁、二〇一七年）に依った。
（8）善宝寺については、佐藤憲昭「沿岸地域の寺院と宗教的意味空間」『日本の沿岸文化』（古今書院、一九八九年）に詳しい。